

愛知県(県域)

1 産地の概要

＜対象品目＞ 鉢物

＜産地の現状・課題＞

植物体全体が商品である鉢物類の防除圧は高く、化学農薬による環境負荷が高い品目であるとともに、農薬による防除作業が生産者の大きな負担となっている。特にヤガ類、アザミウマ類、ハダニ類、うどんこ病は宿主範囲が広く鉢物類共通の病害虫であり、温暖化に伴う発生期間の長期化や薬剤感受性の低下等により化学農薬による防除が困難となりつつある。

近年、虫の光応答に関する研究が進み、植物への定着を阻害する赤色及び緑色LEDが商品化されている。本県ではシクラメンにおいて赤色及び緑色LEDによる害虫防除効果が確認され、産地への導入が進んでいる。しかし、鉢物生産は同一施設内で多品目を組み合わせた栽培体制であることから、普及を推進するためにはLED照射による生育への影響や防除効果を他の品目でも確認する必要がある。

さらに、先行事例の無い光源(UV-B、青色LED)を用いた防除効果の実証を並行して行い、生産者のニーズに対応できる光を活用した防除体制を構築する。

2 検討体制

＜愛知県組織と関係機関の役割＞

- ・農業水産局農政部農業経営課(事務局)
- ・農業革新支援センター(事業のコーディネート、技術指導、栽培マニュアル及び産地戦略のとりまとめ)
- ・普及指導センター(農業者との調整、実証ほの運営管理、調査、技術指導、栽培マニュアル及び産地戦略の検討、産地への情報提供、普及支援)
- ・農業総合試験場(試験方法に関する助言)
- ・農業者(実証ほの栽培管理、技術の実証)
- ・JA、JAあいち経済連(農業者との調整、実証ほの運営援助、調査協力)

3 グリーンな栽培体系

＜環境にやさしい栽培技術・省力化に資する技術＞

取組項目	作業段階	新たに取り入れる技術
化学農薬の使用量の低減	病害虫管理	＜取り入れる技術＞ 1、光を利用した物理的防除及び周年利用技術 2、フェロモン及び粘着トラップによる発生予察
		＜見込まれる効果＞ 1、ヤガ類、コナジラミ類及びうどんこ病等の施設内密度が低下し、化学農薬の散布回数が削減できる。(1年当たり20回→17回) 2、ヤガ類及びコナジラミ類の発生初期に効果的且つ効率的に防除することにより、化学農薬の散布回数が削減できる。(1年当たり20回→17回)

4 活動内容(予定)

緑色LEDの鉢物類(ハツユキカズラ、プリムラ、ペペロミア、コプロスマ等)への照射が①生育・開花に及ぼす悪影響が無く、②ヤガ類の被害が減少し化学農薬散布回数が減少することを実証し、③周年使用技術の確立を目指す。青色LED、UV-Bなど事例の無い光源は①鉢物類(ポインセチア、ミニバラ)への照射による生育・開花に及ぼす悪影響が無いこと、②対象病害虫の被害が減少し化学農薬散布回数が減少することを実証する。

鉢物類の栽培施設内外にフェロモン及び粘着トラップを設置し、ヤガ類及びコナジラミ類の発生消長を調査する。この結果に基づいた防除を行うことで、化学農薬散布回数が削減できることを実証する。